

◆絵図のいろいろ 関ヶ原之図（解説八ページ）



蓬左

HÔSA

NO. 63

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室

三・関ヶ原合戦と尾張

九月三〇日～十一月八日

十一月一日～十二月三日

四・雑賀重良旧蔵歌書3

江戸時代の狂歌を主に――

一月六日～二月七日

二月一七日～三月一八日

◆関ヶ原合戦と尾張

慶長五年（一六〇〇）九月一日に関ヶ原で天下分け目の合戦がおこなわれ、徳川氏が覇権を得ました。この隣国美濃での決戦の勝敗に、尾張の国内情勢や武士の動向が大きく関わっていました。関ヶ原合戦四百年を迎えるのを記念して、関ヶ原合戦と尾張との関係を、この展示でとりあげます。

まず、関ヶ原合戦と尾張との関連に着目しながら、同合戦に至る経過についてご紹介します。

慶長三年（一五九八）、豊臣秀吉が幼い秀頼を残して病死すると、五大老筆頭の実力者徳川家康はしだいに政局の主導権を握っていきました。慶長五年、家康は、陸奥会津城主上杉景勝に反逆の企図ありとして、諸大名を率いて会津に向かいました。尾張からは、清須城主福島正則、黒田城主一柳直盛といった大名のほかに、武功で有名な兼松正吉、中村元勝も従軍していました。

徳川家康の会津攻めに乗じて、七月に石田三成は、大老の一人安芸広島城主毛利輝元を盟主として大坂城に迎え入れ、諸大名に家康打倒を呼びかけて兵をあげました。三成らの挙兵を知った家康とその率いる諸大名は引き返して三成らを討つことを決定し、

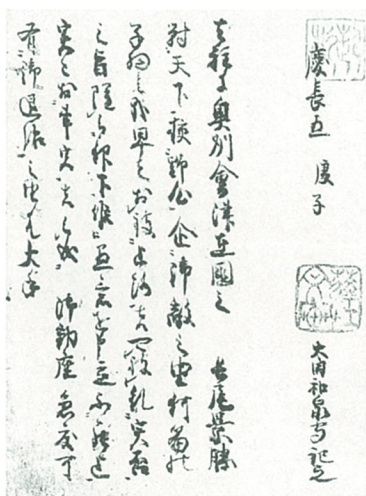
まず福島正則ら豊臣恩顧の諸大名を先遣隊として送り込みました。他方、三成ら西軍は、美濃・尾張を確保して、西上する家康方東軍を撃破しようとして、濃尾の諸大名に参軍を働きかけました。美濃岐阜城主織田秀信（信長嫡孫）が西軍の呼びかけに応じると、濃尾国境の諸領主、犬山城主石川光吉、竹鼻城主杉浦直勝らも西軍に参加しました。しかし、城主福島正則らが出陣中であつた清須城は、西軍の手に落ちず、豊臣秀頼に仕える、尾張在住の馬廻りたち（尾張衆）、生駒家長、阿比子善十郎、澤井雄重らも清須城に入城し、正則に与して戦うこととなり、尾張における徳川方の優勢は決定的なものとなりました。

八月一四日までに、福島正則ら先発の諸大名は清須城に集結し、同二日に二手に分かれて岐阜城をめざしました。一柳直盛ら尾張武士の手引きで難なく木曾川を渡った東軍諸勢は、二三日に岐阜城主織田秀信を降伏させました。翌二四日、東軍諸勢は西進して、西軍の拠点大垣城の北、赤坂に陣を構えました。この報告をうけて、徳川家康の本隊三万は九月一日に江戸を出発し、一四日には赤坂の先発隊と合流しました。同夜東軍が直接近江・大坂へ向かう計画と知った西軍主力は、関ヶ原へ移動し、東軍もこれを追いました。

九月一日（新暦の一〇月二日）早朝、一〇万を超える東西両軍が、関ヶ原周辺に布陣しました。午前八時ごろ、松平忠吉（徳川家康四男）・井伊直政（忠吉の舅で後見役）は、徳川氏の面目のために合戦の先駆を果たそうと、先鋒に予定されていた福島正則の陣の脇を通り、敵前にて西軍を銃撃しました。正則もすかさず西軍方の宇喜多秀家勢を銃撃させました。福島勢とその先手に参加していた尾張衆は浮喜多勢に突撃して一進一退の激闘となりました。

石田三成ら西軍は、劣勢ながら奮戦してしばらく激戦が続きました。しかし、東軍方に内応していた吉川広家の策謀によって、南宮山の毛利秀元らの諸勢三万余は動けず、松尾山の小早川秀秋勢一万五千が東軍に寝返ったため、午後二時ごろには西軍は総崩れとなりました。唯一残った島津義弘勢は、家康本陣の脇を突破して南の伊勢へ逃れました。先頭を駆けて追撃した松平忠吉・井伊直政は負傷しました。

わずか半日の決戦の結果、敗北した西軍の諸大名は処罰され、政権は徳川家康に帰しました。関ヶ原合戦には多くの武士たちが参加したため、参戦した武士らが後日作成した覚書や、彼らの証言を聞き書きした記録が多数残されました。『おあむ物語』は、当時大垣城にいた女性の珍しい聞書です。これらを材料にして、後世に関ヶ原合戦記が多くまとめられました。まず、江戸幕府が、徳川家康の幕府創業の事蹟を顕彰するために各種の関ヶ原合戦記を作らせていますし、参戦した諸大名家においても自家の武功を記念するために同様なことをおこなっています。兵学者たちも関ヶ原合戦を研究対象としており、宮川尚古の『関ヶ原軍記大成』はその代表的な著作といえます。蓬左文庫の前身である尾張藩御文庫に



太田牛一『太田和泉守記』
（関ヶ原合戦記）

も、家康の遺徳をしのぶためや、兵学研究に役立てるために、関ヶ原合戦に関する合戦記や合戦図が収蔵されました。

また、関ヶ原合戦後に、松平忠吉は尾張清須城主となり、同合戦に参加した家臣ともども、武蔵忍城から移ってきました。忠吉は、尾張の領主になるに際して、父家康に願ひ出て、関ヶ原合戦で活躍した尾張衆たちを家臣に加えました。慶長十二年（一六〇七）に忠吉は病死しますが、弟で家康九男の徳川義直が代わって尾張の領主となりました。忠吉の家臣の多くは義直に仕え、尾張藩家臣団の中核となります。関ヶ原合戦の武功は、各藩士の家に伝わり、尾張藩が編さんさせた藩士系譜集や記録に採録されています。蓬左文庫に所蔵されている関ヶ原合戦に関する書籍類から、関ヶ原合戦と尾張地方の関わりについて紹介します。

◆雑賀重良旧蔵歌書3

―江戸時代の狂歌を主に―

歌書の収集・研究家として知られた雑賀重良氏（一九〇〇～八三）が収集された、一八、二〇〇点余に及ぶ資料が、ご遺族によって、昭和五八年（一九八三）に蓬左文庫に寄贈されました。平成一〇年（一九九八）に『雑賀重良旧蔵書目録』が刊行され、一般公開（予約制）も始まり、すでに多くの方にご利用いただいています。

蓬左文庫では、平成一〇年に「雑賀重良収集歌書展」で旧蔵歌書の代表的なものを、平成一二年に「雑賀重良旧蔵歌書2―和歌の伝統から近代短歌へ―」で近・現代の短歌雑誌や歌集を紹介しました。今回の展覧会では、主として江戸時代の狂歌をご紹介します。石川了氏（大妻女子大学教授）のご指摘（『蓬

左』六〇号参照）によると、雑賀重良旧蔵書のうち、狂歌資料は約三〇〇種、うち約一八〇種が江戸時代の刊本・写本で、そのうちの約一四〇種が冊子形態、残りが一枚摺です。江戸時代の狂歌の歴史にそって、①元禄から明和期の上方狂歌系、②天明狂歌を頂点とする江戸狂歌系、③狂歌会等の一枚摺の順で、特に尾張関連の資料を展示いたします。

* * * * *

狂歌とは、五・七・五・七・七の短歌の形式に滑稽な内容を盛り込もうとするものです。狂歌は古くから有りましたが、和歌の權威の強い時代には、「当座の狂歌」として記録されることはありませんでした。中世の伝統に縛られない近世に入ると狂歌は盛んになってきました。

まず、上方で松永貞徳の俳諧の門人を中心に狂歌が普及し、その流れを汲む鯛屋貞柳が、元禄から明和期の大坂に出るに及んで、上方狂歌の大流行となりました。名古屋でも、貞柳の門人秋園斎米都、その弟子永日庵其律が中心となって、その門下を広げていきました。紹介する資料では、其律の門人省斎可童編『狂歌集』（其律百ヶ日追善集『時雨の月』、一七六一刊）、米都も詠を寄せた、美濃神戸の人々の『歳旦狂歌集』、烏川を中心とする「慮竹斎連」の『狂歌集』（二七九〇刊）などが貴重なものといえます。

* * * * *

上方に対して独自の動きをみせた江戸では、内山椿軒門下の、唐衣橋洲、四方赤良（大田南畝）らによって明和六年（一七六九）に開かれた狂歌会から、本格的な江戸狂歌が始まります。天明三年（一七八三）には、橘洲編『狂歌若菜集』・赤良編『万歳狂歌集』が刊行され、江戸狂歌は急激にブームとなりました（天明狂歌）。江戸狂歌の流行は名古屋に及

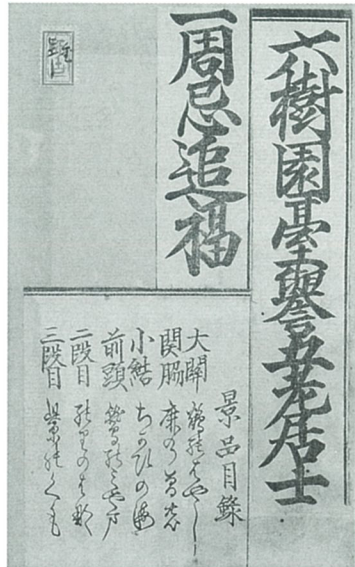
び、寛政九年（一七九七）の段階で、橘洲は「尾陽（尾張）はすべて予が門葉のみにして、他の指揮をうけざるは、まさに雪丸・田鶴丸・玉浦・金成・桃吉・有文の諸秀才、よく衆をいざなふ故なるべし」（『狂歌弄花集』）と記しています。紹介する資料では、田鶴丸・金城・雪丸編『狂歌ねがひのいと』（一八〇〇序）、橘洲の賛がある『狂歌蓬が鳶』（一八〇二刊）、田鶴丸編『狂歌弄花集』（一八一七刊）などが代表的なものといえます。

* * * * *

江戸狂歌の大流行で、名古屋でも田鶴丸などの宗匠のもとで、月ごとの狂歌会が開かれました。事前に、題や投稿期限・入花（添削料）などを印刷したチラシが配布され、会の終わったあとでは参加者を得点合計順に大関以下の相撲の「番付」に見立てた成績表などが一枚摺で出されました。これらも狂歌が多くの人々に愛好されたことを示す資料といえます。

江戸時代の人々に愛好された狂歌に関する資料を、雑賀重良旧蔵歌書より紹介します。ぜひ御覧ください。

六樹園（石川雅望）一周忌
追福狂歌会チラシ（部分）



関ヶ原戦図（中618） 江戸時代写 57×81cm

慶長5年（1600）9月15日、決戦場関ヶ原付近で対峙する東西両軍の布陣状況（部分）。



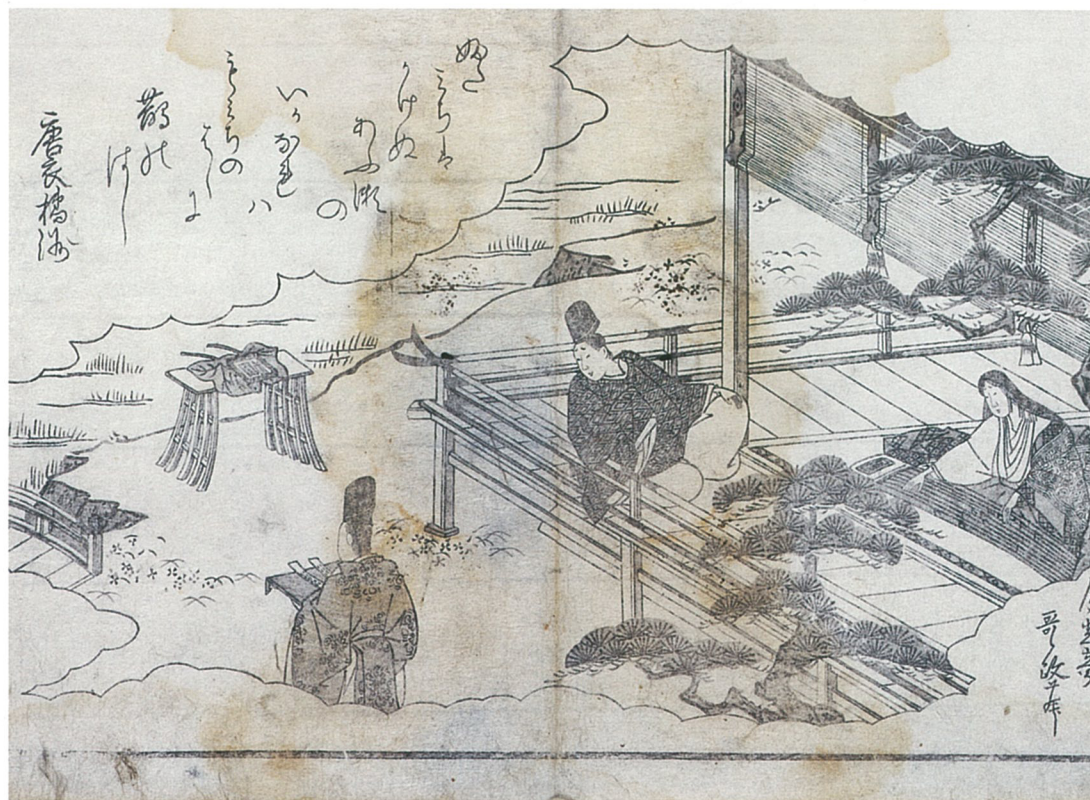
狂歌ねがひのいと 江戸後期刊 24×16cm

唐衣橋洲門下の田鶴丸・金成・雪丸編で、月光亭哥政（牧墨僊）の画入りである。

唐衣橋洲

ふたみちはかけぬ逢ふ瀬のいかなれば

もみぢのはしに鵲のはし





『短歌雑誌』12巻6号掲載「歌壇ふたおもて」と登場する雑誌の数々

◆雑賀重良旧蔵書の閲覧方法

別棟収蔵の為、閲覧は原則として事前予約制となります。閲覧希望日の3日前までに、文書または電話で、蓬左文庫まで御連絡ください。

◆「雑賀重良旧蔵書目録」販売中

頒価 5,000円 送料 520円

郵送での販売をご希望の方は、上記金額を現金書留にて蓬左文庫あてお送り下さい。
(送料分は切手でも可) くわしくは、蓬左文庫までお問い合わせください。

昭和四年の歌壇

— 雑賀重良旧蔵書の雑誌から —

島津 忠 夫

雑賀文庫には、昭和初期の稀観の雑誌が多い。その中の一つ「新短歌風景」というわずかに二十頁そこそこの小雑誌が昭和四年二月の創刊号から昭和五年八月号まで断続的に伝存している。「和歌文学大辞典」にも記載がなく、近代文学館にもないようだ。「芸術と自由」に加わっている松本昌夫を「編輯兼発行人」とする口語短歌の雑誌で、東京の「新時代の歌人社」を発行所としている。その第一巻第十一号（昭和四年十二月）（七頁写真の「編輯末雑信」に、歌壇は昭和四年度に於て、近世にない程のめまぐるしい転換期に会ひ、途上にある者に右か左か行く処を迷はしめる事が多いやうでした。即ち全歌壇の転換期を招来した一因は明らかに、これまでの口語歌運動であり、更に其の次のプロレタリア新短歌運動でありました。この二運動を、所謂新興短歌運動と称すべきであります。其のあひだに、形式上には定型律、基準律、自由律、内容上には無産階級、中間中産階級などの諸問題が論じられ、研究され、創作され、雑誌として有力なるものは主として、文語歌壇側から階級的陣営に目醒めた一群であつて、「短歌戦線」「尖端」「黎明」が合同して「短歌前衛」となつて九月創刊、次いで十月には、口語歌壇側から階級的陣営に目醒めた一群が「新興歌人」（これは、階級争闘の宣伝文をかく職人の集りではない）を創刊したのであります。いづれも口語歌であることは勿論です。

（下略）

と記している。今日ではよく知られていることであり、取りたてて珍しい記事ではないが、当時の生の発言で

あるだけに、いかにもその時代の息吹が感じられる。

ここにいう「短歌戦線」（第二巻第三号 昭和四年三月）、「尖端」（創刊号 昭和四年三月。ほかに四月号、六月号）、「短歌前衛」（創刊号 昭和四年九月。ほかに第一巻第二号十月、第四号十二月、第二巻第一号 昭和五年一月）があり、その面影を生々しく伝えてくれる。「新興歌人」はないが、その創刊号の広告が「短歌雑誌」第十二巻第十号（昭和四年十月）にあり、「新興歌壇の権威・新人の登竜門」をうたっている。ただ、その顔触れから見ると、必ずしも口語歌壇とは言えないようだ。

同じく昭和四年には、楠田敏郎を発行人とし、柳田新太郎を編輯人とする「短歌月刊」が五月に創刊を見る。この「短歌月刊」も、第一巻六冊、第二巻六冊、第三巻一冊が蔵されている。その創刊号の「方向を指示するもの」と題した巻頭言には、

今やわが短歌壇は全く平静を失つた。この波立つ慌しい姿を見よ！

波立つ慌しい姿！ この言葉は一部のものにとつて全く空虚に響くであらう。けれども、自己に最も忠実であるところのもの。また短歌壇の現実を偽りなく見うるものは、かかる言葉を百パーセントの真実としてうけとるであらう。今やわが短歌壇は全く批判の基準をさへ失はうとしてゐる。

旧短歌—新短歌。口語歌—文語歌。さうしてここにも階級的対立の姿が明らかに描き出された。—対立・矛盾、あてもなく喧噪である。

茲に於てわれ／＼は一切の矛盾・対立の姿を意識的に反映する。われ／＼はこの矛盾・対立を絶対的・凝固的たらしめない。

矛盾の統一は客観的世界そのものの法則であり、対立物の統一を認めることは弁証法の基礎的特徴の一つである。

われ／＼こそ短歌の方向を指示す唯一人の

ものである。

とある。これが、「短歌雑誌」に対して、新興短歌を擁護する短歌綜合雑誌としての役割を担おうとしたことが知られる。それは創刊号の目次を見ても歴然としている。第一回歌談会として、柳田の司会で、篠井嘉一（香蘭）・伊沢信平（短歌戦線）・石樽茂（尖端）・大熊長次郎（青垣）・大熊信行（まるめら）・田辺駿一（黎明）・大悟法利雄（創作）・馬場静浪（白珠）・前川佐美雄（心の花）・矢代東村（詩歌）といった面々で激論を闘わしている。その内容は、「問題の所在」として抜き出しているところによると、「一、混沌たる「詩歌」の現状。一、いかに「新しく建設」されて行くか。一、歌壇の今後進むべき道は何か。一、この混沌の中に将来への萌芽を認むるか。一、その萌芽とは何か。一、この萌芽は果して良い萌芽か。一、批判の基準は何か。一、階級性及び社会性。一、無産階級短歌の将来。一、芸術至上主義の正体。一、短歌に於ける階級対立」で、石樽茂らの主張が威勢がよい。「尖端」創刊号に、「今日の批判—歌壇評—」として、石樽茂・前川佐美雄・五島美代子で、「アララギ」「地上」「香蘭」「黎明」「詩歌」「短歌戦線」をあげた中に、「詩歌」では、「どたりと体をドアに打ちつけて這入れれば既に日暮の暗さ」の前田夕暮の一首を取り上げ、茂が「詩歌」の全面的な雑騒音、之はその中の一番だ」というのを受けて、前川が、

発電所の歌、前田氏の素朴さが割合に出てをり表現も板に着いてゐてある感じを呼びおこす。だが何としても閃きに乏しすぎる。詩歌の歌はアラ、ギに比べて著しく近代的であり、自由主義である。材料表現形式共にこの傾向を持つ。この傾向は近時急速に激しくなり、詩歌の現状は今や遂に収拾ならぬ貌に見える。この傾向は慶すべきか？ プロレタリア短歌に対して忠君愛国歌あり、口語歌に対して文語歌あり、二十

四五字の歌あり、五十字位の歌あり、全く目も当てられない。詩歌は過渡期だ。乱れるだけ乱れしめよ。しかしその中から新しく建設されて行け！アラ、ギの如き凝固主義よりも幾層倍かの価値を持つ、これは慶せられてい、のだ。しかしこの場合の指導者は断じて前田夕暮氏であつてはならぬ、前田夕暮氏の価値は詩歌を収拾ならぬまでに乱れしめた、皮肉なしかも喜ぶべき価値だけだ。この歌の如きもその条件に適合するのみで最早や今後の用に立たない。

といったところを、話のきっかけとして、それが、「詩歌」だけの問題でなく、現代の短歌の問題として論じられて行くのである。「編輯ノート」に柳田が「本誌は絶対に不偏不党、ただよき檜舞台であることを念じてゆく考へだが、創刊号は特に歌壇転換期当面の問題を主として取扱った。次号からは真に総合的の殿堂として恥じないものになるだらう」と述べているが、もとより「短歌雑誌」との差ははつきりとしている。

一方の「短歌雑誌」は、大正六年に創刊され、短歌総合雑誌としての使命を果たしてきたのであるが、さすがに、この昭和四年ともなれば、歌壇の新しい動きを無視することも出来なくなつて来る。「短歌月刊」の創刊に対しては、第十二巻第六号（昭和四年六月）に岡野直七郎の「歌壇ふたおもて」という文章があり、「今度創刊された『短歌月刊』といふ雑誌を見ると、反射砲の欄に、『国民文学』、『水鏡』、『潮音』、『アララギ』、『創作』、『青垣』、『橄欖』、『霸王樹』、『等』、『等』、『文語歌の牙城未だゆるがず』と断片的に書いてある」より始まる歌壇時評のような文章の中に、私は、私の手許に寄贈された数十の歌の雑誌のうちから、「国民文学」、「水鏡」、「潮音」と書いてあるま、の雑誌を取り出して重ねて見た。いずれもぶ厚いものばかりである。それから私は、新短歌運動の先駆と銘々で自賛してゐる、

「まるめら」、「黎明」、「尖端」、「短歌戦線」、少し古い「芸術と自由」と又抜き出して重ねて見た。みな薄いものばかりである。これらの全部を綴ぢ合はせても前者のあるものよりは薄いのである。厚い事は人数の多いのを示し、薄いのは、人数のすくないのを表す。然し私はこゝで現在の人数の問題を比較しようと思ふのではない。疑問は将来にある。

という。岡野は、もちろん文語歌の立場に話を導いていくのであるが、この人数の差も、一つの真実である。第七号には、河野健二の「プロレタリア短歌運動最近の発展」といった文章も掲載している。さらに第八号には、「対立批判一人一首評」として、対立する歌人の歌を編集部で名前を伏せて批評をさせた上で、その歌の作者を明らかにして、掲載している。たとえば、当時は新興短歌の側に身をおいていた前川佐美雄が、「崖地に細木あやふく傾けり誰も知らねど胡桃の木なり」（実は対馬完治の歌）に對して、

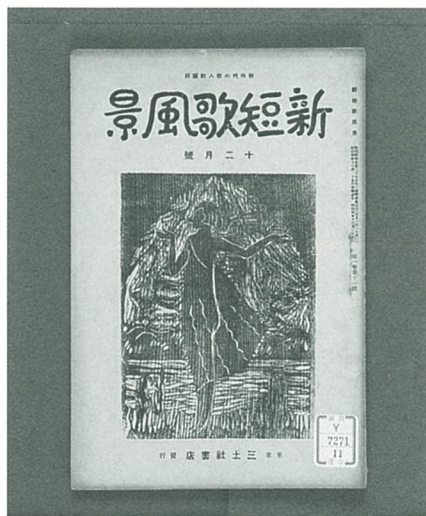
これが歌か、これが詩か。何といふ下手な歌だ。旧短歌としても、外面描写だけではないか。アララギズムの外真似だけだ。こんな歌には僕らが悪口の喩を容れるまでもないではないか。已に旧歌人仲間にして無茶苦茶に蹂躪されてゐる歌だ。こんな歌でも、もう少し上手になりたければ、赤彦あたりの歌集を三日読め。それで沢山だ。こんな歌づくりは今すぐに地球から追つ払へ。それで、モダンリズムの歌でも作つたら、又ちよつとぐらゐは相手にしてやる。だが、こんな歌を作る奴はそこまで行く氣遣ひはない。こんな歌を作る奴に限つて、歌だ歌だ、歌様々である奴だ。こんな歌を真面目に相手にするだけやばだ。やばの骨頂だ。悪口を言ふにもくたびれる。消えうせろだ。

大体がこういった罵倒に終始しているし、編集者の

方でも、遊びの気持からの企画ではあるが、結構読者の反応があつたと見えて、何号か続いている。しかし、前川の評は、若さから来る罵倒であるが、古い歌を捨てて、新しい歌に志した一端をほのめせている。

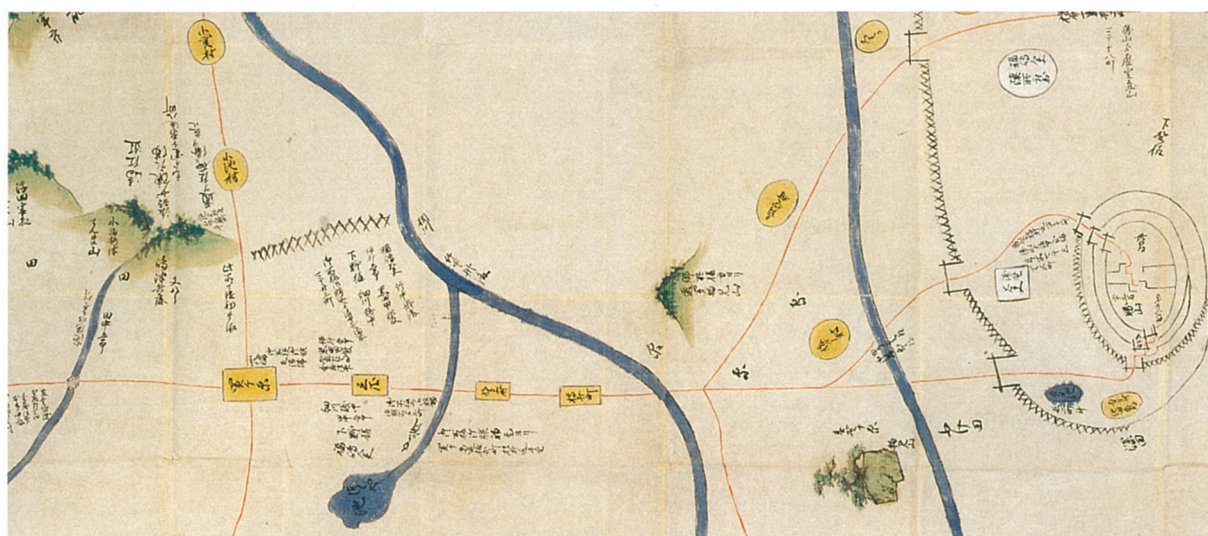
「短歌雑誌」を一気に読みながら、一つ驚いた記事は、第十三巻第九号（昭和五年九月）に見える「作歌履歴」である。浅野梨郷以下若山喜志子に至る四十四人の当代の代表歌人の履歴を、一、本名、二、現住所、三、出生地、四、年齢、五、経歴、六、職業、七、作歌経歴、八、著書、九、関係雑誌の項目に従つて略述しているのであるが、意外に若いのである。最年長は石樽千亦の六十二歳で、最年少が土田耕平の三十六歳。太田水穂が五十五歳、尾上柴舟が五十五歳、川田順が四十九歳、斎藤茂吉が四十九歳、前田夕暮が四十八歳、北原白秋が四十六歳、土岐善麿が四十六歳、土屋文明が四十一歳、といったぐあいである。この中には入っていない筏井嘉一は三十二歳、前川佐美雄は二十八歳、坪野哲久は二十五歳であつた。

（大阪大学名誉教授）



『新短歌風景』1巻11号（昭和4年12月）

◆絵図のいろいろ (表紙口絵解説)



関ヶ原之図 (図355)

江戸時代写 160.5 × 136.7 cm (部分・東西両軍本陣付近)

慶長五年(一六〇〇)九月一五日の関ヶ原合戦における、東西両軍の布陣の状況を描いた合戦図。本絵図は、関ヶ原周辺の山々などに彩色をほどこして絵画的に表現するとともに、池水や陸路を描き、合戦の進行に合わせて武将の動きを注記する。東は大垣城、西は山中宿、北は菩提山、南は栗原町まで描かれており、九月一四日から一五日にかけての、東西両軍の動きを見とることができる。とくに本絵図の特徴としては、赤坂勝山の徳川家康本陣をはじめ、福島正則(絵図では福島大夫)・浅野幸長(同浅野大夫)・池田輝政(同池田三左衛門)などの東軍陣所、長宗我部盛親・大谷吉継(同大谷刑部)などの西軍陣所といった、九月一四日の両軍の陣所が詳しく描かれている点が挙げられよう。本絵図には、東軍に寝返って勝利をもたらした小早川秀秋の名は注記されていないが、秀秋の陣所松尾山の山頂には削平された平地が描かれている。現在も、山頂には、土塁で囲まれた平地が遺構として残っているというところであるから、現地での観察に基づく描写が加えられていることがわかる。一四日の陣所に比べると、一五日の決戦場での記載は簡略で、家康の本陣の動きが、「御所様御旗初」(午前六時ごろ)、「同二ノ御旗」「同御旗立詰場」(午前一〇時ごろ)と詳しく記されているのが目立つぐらいである。

本絵図は、代々城代などを勤めた尾張藩重臣肥田孫左衛門家の所蔵で、天保年間(一八三〇〜四四)に尾張藩に献納された合戦図・古城図二六枚のうちの一枚である。蓬左文庫には、この他にも六枚の関ヶ原合戦図を所蔵している。

名古屋市蓬左文庫

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地

TEL (052) 935-2173

FAX (052) 937-0350

◆交通

名古屋駅、栄より

市バス(基幹バス2番)・名鉄バス(「本地ヶ原方面」行)

「新出来」下車、徒歩5分

大曽根より

JR中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

開館時間 午前9時30分～午後5時

休館日 毎月曜日、第3金曜日

祝日(日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開館、月、火休館)

特別整理期間(2週間)

年末・年始(12月28日～1月4日)

閲覧 館内のみ。館外貸し出しはいたしません。

閲覧時間 閉架図書 午前9時30分～12時
午後1時～5時

開架図書 午前9時30分～午後5時

複写サービス 保存上支障のないものについて、マイクロフィルム複写などの方法により行います。

電話・郵便による申込みも可。

取扱い時間 午前9時30分～12時 午後1時～5時

展示 所蔵資料のうち30点程度を随時展示。テーマ、期間、回数は、年度により異なります。

「蓬左」第63号 ☆平成12年9月30日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(名古屋市東区徳川町1001番地)

☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：菱源印刷工業(株) ※この冊子は再生紙(古紙配合率100%、白色度80%)を使用しています。